2025年12月14日

アドベント第3週礼拝説教要約

人の子は戸口に近づいている

（マルコ13・28～37）

一、「だれも知らない」をめぐって

きょう開いたテキストは、かつて主イエスさまが弟子たちに語られたことをマルコが「福音書」という、キリスト教会によって生み出された文書に記したものです。ですが、マルコの福音書が発行された当時――それは、紀元70年頃と思われますが――、キリスト教会にはある問題が起きていました。それは、キリストの来臨が遅れているのはなぜか、という課題でした。教会の指導者たちは、教会員たちの疑問に答えを出さなければなりませんでした。答えを出すと言っても、もちろん自分勝手に教えを創作することはできません。教会は、かつて語られた主イエス・キリストのことばを思い起こし、聖霊に導かれて福音書の中に書き記しました。

教会にとってキリストの来臨は重要なことでした。なぜなら、来臨によって救いが完成されると受け止めていたからです。ところが来臨は来ない、信者は歳を取って死んで行くという現象が現れました（ーテサロニケ4章）。この、キリストの来臨はいつか、という思いは、以来ずっと続くことになりました。

主の年2000年が来る前に、日本でも「再臨が近い」という思いが、うねりのように起こったことを思い起こします。特にノストラダムスの大予言の――それは偽予言ですが――、「1999年7の月に恐怖の大王が来るだろう」という教えと相まって、キリスト教会でも、主の年2000年の前にキリストの再臨があるのではないかと、私も考えていた時期がありました。世紀末は、とかく人々の気持ちが不安定になる時期ですが、主の年2000年は千年に一度であり、そうなるのも仕方がないかも知れません。いずれにしても、キリストの再臨がすぐに来ると受け止められてから、今や2千年近くが経っているわけです。そうしますと、1世紀の時代の教会と今日とではかなり受け止め方が異なると考えたいところです。ですが、単に「1世紀の時代がそのように受け取った」ではなく、聖書は時代を超えた神のことばですから、そう受け取る必要があると考えます。32節をご覧ください。**〈ただし、その日、その時がいつなのかは、だれも知りません。天の御使いたちも子も知りません。父だけが知っておられます。〉**と、主は語られました。いつ語られたのでしょうか。イエスさまが十字架にかかられる前です。さらに、マルコの福音書が発行された時であり、その後ずっとです。「再臨（来臨）は必ずある。しかしいつかは分からない」と教えられます。33節も同じことが語られています。では、まったく分からないのかというと、そうでもないようです。それが、28節、29節です。**〈いちじくの木から教訓を学びなさい。枝が柔らかくなって葉が出て来ると、夏が近いことが分かります。同じように、これらのことが起こるのを見たら、あなたがたは、人の子が戸口まで近づいていることを知りなさい。〉**と主は語られました。使徒パウロも語っています。**〈ーテサロニケ5・2～4〉**と。

二、キリストの再臨への備え

いつあるか分からない、しかし主イエスを信じている者たちにとって突然臨むのでもない再臨を、私たちはどのように受け止めたら良いのでしょうか。もっとも良くないのは、キリストの再臨は紀元1世紀にキリスト教会が共有していた希望であって、それは2千年前である、と考えることです。聖書が時代を超える神のことばであると受け止めるなら、今現在の教会に対して語られていることばです。29節をご覧ください。**〈同じように、これらのことが起こるのを見たら、あなたがたは、人の子が戸口まで近づいていることを知りなさい。〉**と、主イエスは語られました。主がお出でになるのは、きょうであっても、今より千年後であっても、**〈人の子が戸口まで近づいている〉**と受け止めるのが、主の御意思であると考えます。しかし主に信頼を置くことを忘れますと、キリストの再臨を思う思いが薄らいで行くことでしょう。35節、36節のようにです。**〈ですから、目を覚ましていなさい。家の主人がいつ帰って来るのか、夕方なのか、夜中なのか、鶏の鳴くころなのか、明け方なのか、分からないからです。主人が突然帰って来て、あなたがたが眠っているのを見ることがないようにしなさい。〉**と。

キリストの再臨を思う思いが薄らいで行くのは、主の御意思ではありません。その反対も然りです。「再臨がいついつまでに来ます」とか、「再臨がいついつあります」という指導者が現れた場合は、要注意です。

三、キリストはだれに語られたか

神の御子であり、神ご自身である主イエス・キリストは、再臨のことをだれに語られたのでしょうか。「すべての人に」です。37節です。**〈わたしがあなたがたに言っていることは、すべての人に言っているのです。目を覚ましていなさい。〉**とあります。**〈すべての人に〉**とは、これを聞いた弟子たちだけでなく、1世紀の教会だけでもなく、時代を超えて、教会に対して語られたことばです。ですが、それだけではありません。**〈すべての人に〉**ですから、キリスト者でない人も含めて、すべての造られた者たちにです。